

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

もう一つの人生

「いったい、なんでございましょう」

「何も聞かず、娘のゆうを連れて、出雲の右衛門殿の所へ戻ってはもらえまいか」

「何を仰しゃいますやら、旦那さま、私に何か不都合でもございましたのでしょうか？周藤家へ嫁して何年になるとお思いですか。女が一度里を出ましたら、少々のことでは戻れませぬ。どうぞ、理由をお聞かせ下さいませ」

彌兵衛はクニの剣幕に驚き、言葉を続けた。

「許せ、わしが悪かった。理由も話さず、さぞ驚いたであろう。実は、意宇川の川普請を始めるのは、今をおいて無いと思うのだ。松江藩災害復旧工事の許可が下りる見通しは無い。わしは周藤家の身代をかけて、このことを為し遂げたい。長年、このことばかり考えて生きて来た。勘六には庄屋をいずれ継いでもらわなくてはならん。母上は、もう歳だから。しかし、ゆうは、まだ若い。ゆうを連れて右衛門殿の所へ帰れば、そなたたちをきつと快く迎えてくれるであろう」

「旦那さまは、何を考えておいでですやら。旦那さまがなさりたい事を私が気がついていないとでもお思いでしょうか。わたくしも、ゆうも周藤家の人間でございます。例え、明日の生活に困りましても、旦那さまのお側で過ごしたく思っております」

「うむ」



画 高田勲

「わたくしが女でなかったら、一緒に剣山に入り、岩の欠片など運びたく思っております。剣山に女子が入れぬのが残念でなりません。家のことは、私が守りますゆえ、どうぞ心おきなくお仕事にお励み下さいませ」

「有りがたく思うぞ」

彌兵衛の心の中に、しっかりとした決意が出来るつつ有った。

次の朝、まだ薄暗い鎮守さまの境内で、お百度を踏むクニの姿が有った。

裸足で境内を小走りに行ったり来たりするクニの願いは、ただ一つだった。

「どうぞ、旦那さまの川普請が無事進みますように。どうぞ、お守り下さいませ」

彌兵衛に迷いは無かった。

長い間、願っていたことが、今、現実となる。身が引き締まる思いだった。後戻りは許されない。進み出したら、前進するだけだ。

「慎重な上にも、慎重に行動しなくては」

彌兵衛は自分に言い聞かせた。

心が決まってから、彌兵衛は番当の五郎太をお供に近隣の郡や村の災害復旧工事、川普請新田開発など、熱心に視察して回った。

現場では、見掛けぬ顔だと怪しまれて、お咎めを受けることも何回か有ったが、事情を聞いた関係者は、彌兵衛の心意気に感心し、親切に知識や工法を教えた。